津山城百聞録

～二之丸四足門の扉～

津山城の建物は、そのほとんどが失われていて、現在では、移築されて再利用されている建物が、わずかに残されているに過ぎません。その1つに中山神社（一宮）の神門があります。この神門は、津山城二之丸の四足門を移築したものとされており、市の重要文化財にも指定されています。

さて、城門というのは扉付きの門が当然と思われやすいものです。しかし、この神門には扉の付いていたこん跡がなく、もともと扉のない城門であった可能性も指摘されていました。今回は、扉がないということがもたらしてくれた歴史を考える楽しさの1例を紹介しましょう。

▲中山神社神門

文化6年（1809）の正月20日、津山城本丸御殿が焼失しました。津山藩では、ただちに再建に向けて動き始めるのですが、実際に絵図を添えた伺書を、幕府老中土井大炊頭（おおいのかみ）に提出したのは8月21日でした。そして、9月1日付けの老中連署奉書によって再建が許可されたのでした。このことを津山に知らせる御用状は、9月4日には江戸藩邸を出発し、9月17日に津山に到着したことがわかっています。

このとき、江戸藩邸から津山への連絡の中で、老中奉書と同時に、幕府に提出した「伺絵図」の控えと、津山から江戸に送っていた「下絵図」が、送り返されています。

つまり、津山から送った「下絵図」をもとにして、江戸で正式な絵図に仕上げたことになります。そこで、これらの絵図を誰が描いたのかを考えるときに、このような絵図の動きが考えるヒントを与えてくれます。

当時、津山には藩のお抱え絵師狩野如慶（かのうじょけい）がいて、江戸には同じくお抱え絵師の鍬形蕙斎（くわがたけいさい）がいました。とすれば、狩野如慶が描いた「下絵図」をもとにして、鍬形蕙斎が「伺絵図」を仕上げたとは考えられないでしょうか。

そういう目でこの「伺絵図」を見ると、わずかなことですが見逃せない食い違いに気づきます。ここに二之丸の四足門が関わってきます。

現在残っている「下絵図」と思われる絵図を含めて、複数の津山城絵図では、四足門には扉が描かれていません。ところが、「伺絵図」の四足門には、扉が描かれているのです。これは、単なる誤りである可能性が高いのですが、ただ、津山城を実際に見ている人物ならば、あり得ない誤りと思われます。

しかし、江戸に住んでいた鍬形蕙斎は、文化6年の時点では、実際の津山城のことは知りませんでした。「下絵図」を写しながら、「伺絵図」を仕上げるときに、つい、ほかの門と同様に、扉を描き加えてしまったのではないかと考えられないでしょうか。確実な論証は難しいのですが、蕙斎の実務的な仕事ぶりを想像させて楽しませてくれる話題といえそうです。

つやま広報 8月

平成17年 2005 610号

つ・ぶ・や・き 編集室

久しぶりにワクワクするイベントでした。全国から多くの人が津山に結集し燃えたB'zコピーバンドコンテスト。我を忘れて楽しむことって人間に必要なんですね。記録写真係の私も思わず体でリズムとってました。（X）

国体開催が近づいてきました。わが家では某球技の審判とボランティアとして参加。民泊を受ける実家では、選手と交流できるのを楽しみにしています。半世紀に1度の地元開催。いい国体にしたいですね。（e）

あの8月15日から60年。ちっぽけな存在の私も、せめて8月くらいは戦争について考える時間を持ちたいと思っています。独りで、静かに、深く。一人ひとりが少しずつ考えることが、不戦につながると信じて…。（鉄）

6月中のひとの動き

人口	111,409人（前月比＋33）		
男	53,173人（同＋20）		
女	58,236人（同＋13）		
世帯	42,780世帯（同＋27）		
転入	217人	転出	214人
出生	98人	死亡	68人

（7月1日現在）

編集・発行
津山市企画部行政広報室（市役所3階）
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111(代) FAX0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp
☆広報つやまはホームページで閲覧できます
http://www.city.tsuyama.okayama.jp/
発行日　毎月10日
印　刷　株式会社　津山朝日新聞社印刷部

PRINTED WITH SOY INK
R100
広報つやまは、環境保護のため古紙配合率100%再生紙、大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください